

私の手

秋田大学教育文化学部附属中学校 2年  
高橋 麗

私の家の冷蔵庫には三つの飴玉が眠っています。冷蔵庫を開け閉めする度に、一年前の夏にスラム街で出会った子ども達の笑顔を思い出します。

コップ一杯の水を奪い合い、排水が垂れ流された灰色の川で遊び、地面に落ちた残飯を食べ、大きなゴミの山で膿んだ手足で売り物を探す……。テレビ番組を見た私は、「少年少女国連大使」という事業に応募し、スイス・ジュネーブとフィリピン・マニラを訪問する機会を頂きました。WHO（世界保健機関）では発展途上国の貧困について、ILO（国際労働機関）では厳しい児童の不当な労働状況について講義を受け学びました。

マニラでは世界的に問題視されているスモーカーマウンテンに登りました。そこは自然発火で常に煙が上がり、異臭が漂い、テレビ番組で見た以上の凄まじい光景が広がっていました。私は自分の足で悪臭の元を踏みつけながら、しばらくの間、絶句したまま恐怖で身動きがとれませんでした。さらに驚いたことに、そこには十数人の子ども達がぼろぼろのビーチサンダルを履いて日々の生活に役立つ物をそのスモーカーマウンテンで探していたのです。

その時です。たまたまポケットに飴玉を三つ持っていることを思い出しました。私はポケットの中で飴玉をギュッと握り締めました。たった三つの飴玉を彼らに差し出したら、必ず受けとれない子どもが現れます。取り合って争いが起こるかもしれません。けれど今も私は悩み続けています。やはりたった三つだけでも飴玉を渡すべきだったのでしょうか。

一年経った今でも、その答えを探しています。考え続ける中で、必要なのは私が渡せなかった飴玉ではなく、飴玉を作り出すこと、つまり「育てる」ことが大切なのではないかと思い始めました。食物になる芽を育て、知識や技術を持つ人を育て、継続的に食糧を生産し確保することが、あの子ども達の将来や未来を育てることに繋がるのではないかと思うようになりました。

私はいつか大人になります。飴玉を見る度に思い出すマニラで出会ったあの子ども達も、世界中の子ども達も、私と同じように成長し、楽しい時間を過ごし学び、大人になることを強く望みます。

私の手は、ポケットの中でギュッと飴玉を握り締めるためにあるものではありません。ポケットから手を出し、手を差し出し、いつの日か世界の人々と手を取り合い、笑い合える私の手でありたいと思っています。その日のために、今は本を開きページをめくり、鉛筆を握って学び、成長しようとして今日もあの飴玉が私に勇気を与えてくれるのです。